

「40数年前のポンペイで」

青柳正規 元文化庁長官・元朝陽同窓会長

昭和38年卒業（15回生）

去年の暮れ、突然ドイツからメールが入った。ドイツ語で「耳」を意味する言葉がそのまま名字になったオールという昔の友人からの何十年

ぶりの知らせである。メールはまず共通の友人であるイタリアの考古学者から私のメールアドレスを知ったという前書きから始まった。そ

して30年近い音信不通の理由がメールにしてはかなりの長文で記されていた。大学に研究者としてのこの望みを捨てたのは結婚して家庭を持ったからであり、カールスルーエという南ドイツの町の都市計画担当者として働いていたが、定年を迎え数年前から再びポンペイの古代建築に関する研究に戻り、復帰後最初に発表した論文を送りたいので私の住所が知りたいという内容だった。

懐かしさがこみ上げてくると同時に、イタリア留学を終えて東京大学文学部の助手に就職し、ポンペイの現地調査を始めた44年前のことが久しぶりに蘇ってきた。ポンペイでの初めての現地調査は戸惑うことばかりだった。旅費以外には作業員を雇う費用など全く用意することができなかったが、調査対象の古代住宅を試掘する許可は下りていたので何としても実現したかった。そんなとき、オール氏と知り合うことができた。というのもさまざまな国からポンペイにやってくる研究者たちの多くはポンペイ遺跡のすぐ脇にあるホテルを定宿としており、私もオール氏もその例になっていた。日中はそれぞれの研究テーマに沿って60ヘクタールほどの広いポンペイ遺跡に散らばってしまうが、夕方シャワーを浴びてから日没までの2時間ほどは、中庭でビールやワインを飲みながらお喋りをするのが日課になっていた。

日本の大学や学会では決して耳にすることのできない貴重な話からかなりくだけた裏話までがお喋りの中で行き交い、私のような新参者にはすべてが興味深い話ばかりであった。日本におけるギリシア・ローマ考古学の研究状況などにも話がおよぶと、全くお寒い状況でいかんともしがたいと答えるしかなかった。その証拠に、こうやって現地調査に来ているのに作業員を雇う費用など大学は全く援助してくれないという愚痴をこぼしてしまった。そんなとき、数年前からポンペイに通っているいわばポンペイ研究者としては先輩格のオール氏が、明日作業員の主任をつとめるミミ（ドメニコの略称）を紹介してくれるという。

半信半疑でミミにあうと、50人以上もの作業員を束ねているだけあっていかにも懐の深い信頼のおける人物だった。彼はポンペイを研究する学者であれば国籍や年齢をとにかく言うことはまったくなかった。しかもポンペイ研究者として初めての日本人ということでむしろミミの方があれこれと質問を浴びせてくるほどだった。思いもよらないほどの長話になった終わりがごろこちらの窮状を吐露すると、作業の段取りから作業員によっては2〜3時間、もしくは半日非番になる者も出るのも、そんなとき私の現場に派遣しよう、ただし、2日前もしくは前日にならなければわからないからミミの事務所に毎朝立ち寄るようにといわれた。現在のように携帯電話がある訳ではないので、また、公衆電話は私の現場から30分ほど歩く必要があったので、遺跡が職員と研究者のために開門する8時にミミのオフィスに寄るのが日課となった。おかげで、毎日作業員が来るというわけにはいかなかったが、許可を受けていた試掘をほぼ計画どおりにやり遂げることができた。しかも、毎朝私がオフィスに寄るので、作業員や遺跡の職員たちとも顔見知りになった。このことはポンペイで研究調査を遂行する上でおきな武器になった。というのもイタリアでは知りあった人と言葉を交わし日常の挨拶を交わすようになると友人として扱ってくれるようになるからである。つまり遺跡に入るのも、個々の古代住宅を覗く場合も友人としての「顔パス」がきくようになったからである。

オール氏（本当はファーストネームで呼び合っているが）からのメールで久しぶりに40数年前の様々な出来事を思い出すことができた。第二次世界大戦で徹底的に破壊されながら、まさに徹底的に復元されたことをオール氏がいつも自慢していたカールスルーエという町をこの夏にでも訪れてみようかと思いつつある。

（朝陽同窓会のご協力を得て「先輩からの言葉」を掲載しています。）